孟子の王に說くや亦王道によりて國家萬民を萬世の安に置かむとす、詩に之れ有り「高山仰止景行止」と今孟子の人と爲りを想見するに亦斯の如く、布衣を以て王侯に說くに道を以てし、これを寫すに不滅の大文章を以てす、宜なるかな學者千古に傳へて是を宗とし、天子王侯より宇內王道を云ふ者、皆孟子に折衷す、亦聖と謂ふべし。

筆路滔々議論正大不似少女之口氣蓋自賈生過秦論脫化來者可謂傑作。　劍堂評

日記の中より

四年　撫子

○ランニング（五月二十八日）

強い興奮と張り裂け相な緊張との中にランニングをしてゐる人をみつめてゐると、私は胸が一杯になつて口がきけなくなる強いて後援をし樣とすれば聲よりさきに涙があふれ出る。熱い涙、それは決して悲しい意味のものでなく又苦しさを訴へるたちのものでもない。あの全力集注して倒れてしまふ瞬間まで、否倒れてもすぐ起きあがつて目的に向つて突進する淸い美しい立派な努力に打たれて心の底からゆり動かされた純な感激の表現です。

私は何か非常な刺戟に目覺されたとき「よし、死ぬまでやる」と自分で自分の心にしつかりと誓ひます。けれども時が徐ろに其緊張の山を崩して行き興奮をうばひ去つてしまふ。何の洗鍊をも經ない原始的な生き樣とする力が强く私を支配して、若しい努力を避けしめ靜かな春の海を大艦で航海するときの樣な平和さと單調さとの中におひやつてしまふ。だから「死ぬまでもやる」といつたときこの緊張の最後であり努力の絕項になつてしまつてゐる。

「倒れて後止む」といふ語を實現する努力の絕項の瞬間は、普通の狀態には來ないものゝ樣に思はれる其つきつめた瞬間が今あのつまづいて倒れた人の上にみられる。眞到に一生懸命といふ尊い偉大な人をランニングの中にみいだした私は、只の一度でもいゝから、ランニングをやつてみたいとしみ〴〵思つた。

○巢鴨病院（五月三十日）

去る傳手を得て私は巢鴨の病院に行つて觀ることが出來た。二三日降り續いた五月雨にめつきり美しさをみせてゐる新綠は此所にも初夏を暗示してゐる。廊下をもつてつながれた煉瓦造りの棟每にはそれ〴〵庭があつて軟かいなつかしい草花が折柄の雨に露をおびてきもちよく咲いてゐる。氣狂ひの中にも花を愛づる程の正氣をもつてゐる人があるのか知らんと思ひながら導かれて行つてみて驚いた。薄暗い汚い室に澤山な患者がゐる。心の亡び去つた人間の殘骸のみぐるしさ淺しさを恁うまでとは思はなかつた何といふいたましい敗殘の群でせう。一々の印象については迎もかく事が出來ぬ。まるで知らなかつた慘酷さをわざ〴〵味ひに來た自分の無知をどんなに悔いたことでせう。ロシア人でなくともこんないたましさをみる程なら捨て去られたあはれなこれ等の人々の形骸を私は如何にかしてやりたかつた。こんなになつて後までも亡びて行かぬ生きる力がたまらなくおそろしかつた。のろはしかつた、しかしながら如何することも出來ずに病院を出て停留所に電車をまつ間。私の目に映じた通行人がみんな氣狂ひにみえた。そして特に私の近くを通る人等は今にもあの不安らしい目と變な聲と調子とで何かいひ出し相でこはくてたまらなかつた。電車にのつてからも私の目は不安にかゞやきつゞけてゐたに相違ない周圍の人か妙に自分ばかりをみつめてゐる樣に思はれる。やがて高等學校前で電車を下りた恰度其時向ふから大聲な歌をきいた。「あ、あすこにも氣狂ひがゐる」と思はず獨言つてしまつた。

ある夜

うら子

雜木林に殘りし夕陽のかけ薄れて、蒼茫と暮れ行く六月の夕こそ靜けきものなれ。

靑ざめし空にあて人の瞳にも似たる星は、早う三つ四つ輝きそめたり。深く悲しき明滅の！あはれ幽玄の世界につゞく、永遠の輝、獨り欄干によれば、いつのまに、何處より現れにけむ、影の如く靜かなる人、吾が後に立てり。やゝありて、影の人は言へり。